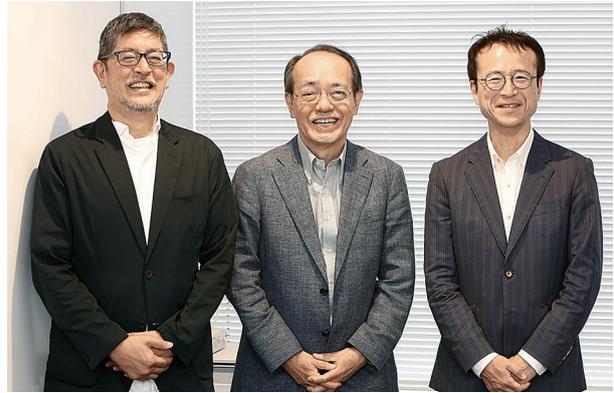


工事が複雑に絡み合う東京・渋谷駅周辺の大改造では、全体調整の場が重要な役割を果たした。パシフィックコンサルタンツ（パシコン）の小脇立二社会イノベーション事業本部総合プロジェクト部長 点まちづくり室渋谷エグゼクティブプロジェクトマネージャーは「最後まで考慮した全体工程を作らないと破綻する」との危機意識があったと振り返る。約2年かけて施工ステップ図などを作成し、随時更新している。

分野を越え関係者を連携する歯車に

生き字引として街に連れ添う

渋谷大改造を後押しした(左から)小脇氏、岸井氏、久保氏



視庁と協議した。個別協議ではなく、エリア単位で調整するのは警視庁でも初めてだったという。

有識者として参画する岸井隆幸氏（計量計画研究所代表理事、日本大学名誉教授）は「それぞれに言い分がある。ルールとバランスを意識して落とし所へ導くのが、真ん中にある建設コンサルタントの

「シブヤ・パートナー」の概念図（パシコン提供）



大事な役割」と指摘する。同社は「シブヤ・パートナー」と銘打ち、関係者が円滑に動く歯車の役割を果たそうと取り組んできた。大規模な公共交通志向型開発（TOD）では、分野の垣根を越えた連携が不可欠。難易度は高いが、やりがいのある舞台だ。

2027年度にはJR渋谷

駅改良工事や渋谷スクランブルスクエアの第II期が完成する予定。概成が近づきつつあるが社会ニーズは刻々と変わり続ける。久保寿社会イノベーション事業本部総合プロジェクト部長は「時代の変化が非常に早い。渋谷は、できることから戦略的にアップデート

トして街の課題を解決するモデルになっている」と話す。

